

飯能市消費者団体連絡会 会報

No.42

しょうだんれん(消団連)

はんのう消費者便り



2020年3月25日発行
事務局 042-978-2176 小園

平和を考える夏の上映会2019

お話し会&平和展

特集

消団連恒例の「平和を考える夏の上映会」、2019年は8月18日と25日の2日間、「原子力・核の歴史を問う直す」をテーマに『第八の戒律』を上映するとともに、「経験を語る・聞く・伝える」をテーマに「お話し会」と平和展を開きました。今号はその特集です。



映画『第八の戒律』

どこでも同じ嘘が言われている

大木有子

ドイツの核廃棄物再処理工場の建設に反対する人々を描いた(映画『核分裂過程』監督B・フェアハークとC・シュトリーゲルの二人は、工場建設の中止を見届けたが、「どんなに巨大な企みが画策されているかを明らかにしたい」という思いに駆られて「原子力の歴史を描こう」と試みた。

映画『第八の戒律』(1991年)はドイツからフランス、イギリスの再処理工場に向かい、放射能汚染の実態を描きつつ、

ドイツの核実験から始まる核と米国の核実験から始まる核と原子力利用の歴史を記録映像やPR映像などを通して振り返る。注目されたのは言葉だ。原子力を推進する政治家、企業家、科学者、マスコミは何をどう語ってきたか。原子力エネルギーはバラ色に語られた。原発事故の確率は限りなくゼロに近い、放射能は無視できる、と。

「核施設による健康への脅威は一生に1本タバコを吸う程度です。」(英国中央電力庁長官)

しかし、残された核廃棄物に解決策はない。フランスの再処理工場で野積みされる核廃棄物の映像に暗澹たる気持ちになるが、所長は平然と「この放射能は自然界と変わらない。300年監視した後には普通に使えます」と言う。原発事故を経ても、彼らの姿勢は変わらない。

「心配し過ぎも体に良くありません。」(ドイツ放射線防護委員) 彼らの言葉は、この日本で私たちが見聞きした言葉と驚くほどに重なる。

スリーマイル島原発事故の時も、チェルノブイリ原発事故の時も、情報が与えられないまま住民たちは置き去りにされた。母親たちは子どもの身を案じて

声を震わせる。「子どものいる医者はみんな逃げて行ったわ。なぜ私たちの子どもは置き去りにするの。」 「ここは放射能がないと言いなから、なぜ子どもを作らせないの? 中絶の承諾も求められたのよ。」

フェアハーク監督は言う。「どこでも同じ嘘が言われている。それは明白な嘘であるばかりでなく、全く当たり障りのない日常茶飯事のように印象つけられた嘘でもあるし、また全く何も言わない、という嘘でもある。」 『第八の戒律』とはモーセ十戒の第八、「汝、偽証するなかれ」嘘をついてはいけない、の意味である。

映画には、1970年代からドイツの原発各地で起きた反対デモと激しい弾圧の歴史も描かれる。議会では推進派・反対派の議員たちが論戦を繰り広げる。レストリジコ(どんなに技術を尽くしても残る原発事故のリスク)をめぐる言い合う市民。

『第八の戒律』を見たある人は、ドイツ原発の胎動を感じる、と言った。

『農村の結婚改善—憲法第二十四会条会の記録』 上映と新井幸一さんのお話

(8月18日)

川野安紀子

「足入れ婚」と言われ、三日三晩の宴会をしても入籍はせず、働きの鈍かったり孫が出来なかつたりする嫁は返すという人権侵害が残っていた時代に、憲法にのつとつた双方の合意による結婚の実現と家での女性の地位の確立のために加治地区青年団の有志が立ち上げた「憲法第二十四会」。活動を写真に残していたのは現在市内の書店「めいわ堂」の店主である若き日の写真家志望の新井青年でした。その白黒写真はテレビもなく動画が一般化するまで情報発信のメディアとして作られていた「スライド」という形にされて全国に広がり公民館結婚式の先駆けとなりました。

「僕は地元の青年団が、上から降りてきたことをするだけで、面白くなかつたから友人がいた加治青年団に行っていたんだけど、当時篤農家と言われる



スライド「農村の結婚改善憲法第24会条会の記録」より

ような人は農山漁村文化協会（農文協）が発行していた『農村文化』という雑誌を読んでいた、毎週行われていた加治青年団・読書クラブの読書会には農文協の浪江虔（なみえけん）さんが毎月のように指導に来ていました。『農村のサークル活動』（太田堯・編農文協）には小山誠三さんが読書会の報告を書いています。『二十四会』の活動も写真に撮っていたので農文協が脚本を書いて、スライドにしました。脚本に合わせた写真も何枚か撮り、新婚旅行の写真だけでは他の人が撮ったものだけだと

ね。随分売れたようだったなあ」と新井さん。

公民館での結婚式の目的は生活改善で結婚式の簡素化だろうと思っていたら、その根に憲法があったとは。現在は地区行政センターと名前も変わりましたが、その頃の公民館は地域密着で結婚式の手伝いもしていたのですね。



新井幸一さん

い今では見ることができないのは残念です。「銀行前の石段に、原爆が落とされた時そこに座っていた人の跡が色濃く残っていたのは忘れられない。比治山の山頂から見た広島島の街の屋根は廃墟にバラックのぴかぴか光るブリキなのに、反対側の山影は古い黒っぽい屋根が続いていてその違いが衝撃だった。」

1ページから 映画『第八の戒律』監督は言う。「私たちの作品は実は民主主義についての、共に生きる方法についての作品なのです。」福島原発事故の後いち早く脱原発の政策決定を表明したドイツだが、人々はそのような議論を経てそこに至ったのか、映画はその前史を伝えてくれる。

そして、お話の最後に「ちよつとおかしいな、を、おかしくない形にしようとしたその時代の証明です。これからの、この地方の歴史が回転していくお手伝いになればありがたい。」と。

上映後のトークタイムで、福島県飯館村出身で埼玉県に避難しているという男性が発言されました。その人は出稼ぎのため首都圏で働いていて、父親が亡くなった後故郷に帰ろうとする矢先に原発事故。今も帰宅困難区域に家と農地があるそうですが、事故当時、住民票が首都圏に移されていたために、一切の補償を拒否されているそうです。

世界経済フォーラム（WEF）による2019年の「ジェンダー・ギャップ指数」で日本は、前年の110位から順位を下げて153カ国中121位。国連の女子差別撤廃委員会による勧告もスルーされたままです。まだまだ「平等」という言葉にはいきません。「アカ」という言葉もいまだに残っています。が、飯能の先人達が紡ぎだしてくれた歴史を私も不断の努力で紡ぎ続けていきたいと思っています。

事故後に飯館村の同胞たちが高線量地帯に何の情報もなく放置された事、今も子ども達の健康調査がきちんと行われていない事、自分の土地は全て奪われてしまった事、映画と自分達の間が重なって見えたこと語られました。話を聞く私たちも映画の続きを見ているような気持ちでした。

合唱曲「水ヲ下サイ」に出会って

宮寺幸子



8月25日には原民喜の詩に林光が作曲した合唱曲「原爆小景」から「水ヲ下サイ」の音楽を聴きました。若い頃に合唱団の一員としてこの曲に出会い、そのことが自分にとって大きな契機になったという消団連会員の宮寺幸子さんにお話を聞きました。

音楽そのものの素晴らしさ

私は原爆を体験したわけではないけれど、たまたま音楽をやっている「水ヲ下サイ」という作品に出会った。わたしとしてはその音楽の作り方に興味を持ったわけですが、「原爆小景」は最初に「水ヲ下サイ 水ヲ下サイ」って始まるけれど、その作り方、音楽の表し方。「水ヲ下サイ、水ヲ、水ヲ」それが1人の声から2人、3人、何十人になっていく。「水ヲ下サイ、水ヲ、水ヲ、ドウカ、ドナタカ」ってというのがわあーっと広がって。こんなに大勢の人が大変な思いをしたんだっていうのを林光さんが音楽の上で表した。

合唱団フエーゲライン・コール 安保闘争

私自身は何をしたというわけでもなくて、何にも知らないで、合唱生活は東京都大田区久が原小学校でNHK音楽コンクールに出たりしたことで始まりました。その合唱の世界からたまたま朝日新聞の募集で入った合唱団がフエーゲライン・コールで、そこに「安保」というものが入ってきて、という感じでした。(六十年安保の時代)ある意味で林さんが動き出していった時にそういう発言をしていった時期で、わたしは二十歳を過ぎた頃。「水ヲ下サイ」という「原爆小景」の音楽は、「はあー」って心に入ってきて、「ああ、こ

ういうことがあったんだ、日本では。大勢の方が亡くなっ...」

私は原爆すらよく分かっていなかった時代だったけど、そこからずっと音楽とかそういうものから離れられないようになって、どこかで接点を持っていたというか、ね。

その時の合唱団の指揮者がた...いへん、今でいえば「左」の人で、音楽で何を表せるか、音楽で何をできるかっていうのを掲げていた。親はね、すごい目を光らせてね、安保反対だの何のって行くわけだから、父親はハラハラしたみたいで。私の父はもういませんけど、戦争に行つて帰ってきて結婚して私がいるんですよ。だから向こうでアジアで亡くなっていたら(私はいない)。ただ戦争の話は一切してくれなくて、私が安保闘争とかあつたときには、すぐく親を責めて、「何であなたはそういう態度をするんだ」って言って責めたりした時期もあつてね。今のようない時代じゃなくて混沌としていた。私にはまだ年齢的に分らないこともあつただけ...。そこに林光さんの「水ヲ下サイ」という作品が入ってきた。

それから私はそういうものに、安保闘争とか行っていないけど、そういうものに興味を持つようになりました。

出会い、学んだもの

指揮者は印牧真一郎(かねまきしんいちろう)さんという音楽家。奥様は赤羽由規子さん。お二人から、非常にいろんな、熱つていうか、人間の熱情みたいなものを、こういう時にはこうしなけりやいけないだよ、というものを教えていただいた。

ちゃんときちんと意思表示をする。思っているも表わさない人って多いじゃないですか。でもきちんとして自分たちの意思表示をしてね、ご夫婦で。

印牧先生は自分の中にきちんとしてテーマをもっていて、曲を決めるときはみんな決めてるんですけどね、集まってくるのは東大の安保闘争に出た人たちとかね、デモやった人たちとかね、そういう人たちが一時いました。非常に優秀で論理的な人たちがいまして。私があるさいのもその影響かもしれない(笑)。筋を通して、やるべきことをやっていく、訴えていくということ。

それは私の中にはずっと植え付けられたものとして、いろんな意味でね、子育てでも何でも、地域のこととかでもそういう信念でやってきたかな。

ステージでは林光さんはよく来てくださっていて、ピアノなんかよく演奏してくださいましたね。きれいな音を出す方で。音楽そのものもとってもきれいな音楽。とつてもきれいで心の中に入ってくるというか、「原爆小景」という「水ヲ下サイ、水ヲ下サイ」っていう、そこから自分の知らない、自分がやってきた合唱生活と全然違う部分の人たちがいて、そして社会主張をちゃんとして、という、そういうことをすごく学びました。



*1 印牧真一郎 日本音楽協議会元事務局長。「自分の声、自然な声、率直な声そして、今の声」を求めて合唱を指揮する。

ちよっと待った！ゲノム編集

ゲノム編集食品には表示を！

大木有子

昨年「ゲノム編集」の話が盛んに報道されるようになりました。10月1日にはゲノム編集された食品を安全審査も表示も必要なく、市場に流通させる事が解禁されました。「ゲノム編集」って何？安全性に問題はないの？ということ、消団連は昨年6月29日にはDNA問題研究会の神野玲子さんを講師に招いて学習会を、11月25日には分子生物学者・河田昌東さんの講演収録ビデオを上映して学習会を開きました。

●一生活者として

神野さんは専門家でも研究者でもありませんが、一生活者としてこれは大変な問題だと直感し、研究者に呼びかけてシンポジウムを開いたり、学者に直接問い合せしたりして、学んできた方です。日本でたいした議論もなしに拙速にゲノム編集食品の解禁が決められた背景には政府の「統合イノベーション戦略」

があること、いまや私たち一人一人の遺伝情報も「経済資源」として掌握されようとしていること、新型出生前診断とヒト受精卵のゲノム編集が生命の選別につながるなど、はつとさせられるお話でした。

●ゲノム編集食品が食卓へ

ゲノムとは、ある生物が持つ遺伝子の総体です。「ゲノム編集」は、細胞の中で標的とする遺伝子を決めて、それを破壊したり、そこに新しい遺伝子を挿入したりする遺伝子改変の技術です。日本では今、筋肉の成長を抑えるミオスタチンの遺伝子を壊すことで肉厚にしたマッスル真鯛や、高GAVAトマト、高収量の稲などが開発されています。米国ではすでにゲノム編集された高オレイン酸大豆が栽培され、そのオイルが販売されています。この大豆が今年、日本に輸入されようとしています。

厚労省はゲノム編集は自然界の突然変異と同じで、特定遺伝子を切るだけで外来遺伝子を加えない限りは従来の品種改良と変わらない、だから安全審査は必要ないと決めました。しかし河田さんは、これは全く違うと言います。ゲノム編集では、標的遺伝子を切る酵素と一緒に、成功したかどうかを確認するために抗生物質耐性遺伝子など「マーカー遺伝子」を挿入します。これは明らかに外来遺伝子で取り除かなければならないはずですが、厚生省はそのチェックをしようとしていません。抗生物質耐性遺伝子を食品と共に取り込めば腸内細菌が抗生物質耐性になる恐れもあります。

●ゲノム編集は突然変異とは全く違う

植物から動物・ヒトまでゲノム編集は植物から動物・ヒトに至るまで、あらゆる生物分野で急速に進められています。中国では一昨年、ゲノム編集した双子の赤ちゃんが誕生しました。日本でも研究に限ればヒト受精卵へのゲノム編集が認められました。

政府はゲノム編集を成長戦略の根幹に位置づけ、企業も研究者も他に先んじて特許を取ろうと躍りになっていきます。しかし遺伝子という生命の根幹を目先の利益のために簡単に変えてしまつてよいのでしょうか？ゲノム・遺伝子は私たちが考えるよりもずっと緻密に関係しあつていて、解明できたのはまだほんの一部分に過ぎません。しかも改変した遺伝子は世代を超えて受け継がれていくのです。

河田さんは昨年、多分野の研究者に呼びかけて、国に規制を求める学者声明を出しました。

標的遺伝子によく似た別の遺伝子も切つてしまう「オフターゲット」も起こりやすいそうです。切つてはいけないう遺伝子を切つてしまったらどうなるか。また、標的遺伝子を切ることで、他の遺伝子に影響を与える恐れもあると言います。

●植物から動物・ヒトまで

ゲノム編集食品に表示を！

政府はゲノム編集を成長戦略の根幹に位置づけ、企業も研究者も他に先んじて特許を取ろうと躍りになっていきます。しかし遺伝子という生命の根幹を目先の利益のために簡単に変えてしまつてよいのでしょうか？ゲノム・遺伝子は私たちが考えるよりもずっと緻密に関係しあつていて、解明できたのはまだほんの一部分に過ぎません。しかも改変した遺伝子は世代を超えて受け継がれていくのです。

河田さんは昨年、多分野の研究者に呼びかけて、国に規制を求める学者声明を出しました。

ゲノム編集食品に表示を！

消費者庁はゲノム編集食品について、表示をしない方針です。このままでは消費者は食品を選ぶ権利を奪われてしまいます。

私達も一消費者としてゲノム編集の問題に関心を向け、先ずは、ゲノム編集食品に表示を義務付けることを求めましょう。

あとがき

平和展では、図書館から借りた戦争に関する児童書・絵本を中心に30冊を並べました。

原民喜の広島での被爆体験を基に書いた短編小説「夏の花」の中に、詩「原爆小景」の生まれる背景が描かれています。この情景は「片仮名で書くのがふさわしい」。ネット(青空文庫)で読めます。

宮寺さんの話と一緒に会場で聴いた合唱曲「原爆小景」は1970年の第23回全日本合唱コンクールで優勝した福島県立会津農林高校合唱部の録音です。遠くから近くから「水ヲクダサイ」の音が徐々に響き渡り、歌というより声そのもの。後半、嗚咽も聞こえる。指揮した教師高麗正宣氏は初めて高校に赴任し合唱部を指導。歌うことで高校生たちは、あの日を体験した。プロの合唱団の作品とは違つなかがあります。合唱界での伝説の名演。これもネットで聴けます。(K)

